

キューバ革命教育学校とイデオロギー形成

—技術研究所への転換—

山 本 哲 士

問 題 設 定

資本主義から共産主義への移行は「政治上の過渡期」なしには不可能であると、マルクスもレーニンも指摘した⁽¹⁾。階級の死滅が、マルクス、レーニンの窮極目標であり、国家が国家自体を止揚して消滅し、政治が政治自体を止揚していくなかで、また国家の一形態である民主主義も消滅していく⁽²⁾。このような世界史の「弁証法的行程」の移行視座から、その移行過程における、国家・政治・経済・社会・教育をどう具体的にくみかえたらよいかという問題が、彼らにおいて考えられた。これは、「政治上の過渡期」を、人間的価値の変容や、政治概念・組織概念の価値転倒を包括しながら考えていることを意味し、マルクス・レーニンの思想が他の諸思想と一線を画す重要な特徴である。歴史世界に社会主義革命が遂行され、マルクス・レーニンの諸原則を変革の基礎にすると宣して久しいが、しかし今日ではあらためて社会主義そのものの再考察が大きな問題となっている。とりわけ社会主義革命が、生産手段の所有いかんにとどまらない根本的考察を、人間変革の問題としてとらえかえす必要を我々に課しているといえよう。

一九五九年一月のカストロ (Fidel Castro Ruz) の七月二十六日運動 (Movimiento 26 de Julio—M-26-7) を中心とした反乱軍が政治権力を奪取したキューバ革命は、世界史上におけるひとつの社会主義革命を現在もなお遂行している。とくに、キューバ教育の社会主義的転換の過程は、キューバ革命の成功を示す基本的な指標であると思う。

たしかに、アルマンド・アルト (Armando Hart) 教育相の指導下に展開された革命当初の教育改革は、自由主義的性格の強いものであった⁽³⁾。それは一九四〇年憲法に保障された諸権利を、教育行政、学校機構、学校建設等にわたって、政策的・物質的に成就すべく努力するものであり、そして地方分権化、教育予算の増加、校舎の増築・改修がめざましく推進された⁽⁵⁾。そのような改良のなかでも、もちろんキューバ革命の「社会正義」を象徴する「兵営を学校に変える」事業や「学校都市」 (Ciudad Escolar) の建設など独自の教育改革も創造・展開されていた⁽⁷⁾。

農業改革の実施、米資企業や大企業・銀行の国有化は国内の経済的な所有形態を変え、つづく米国との断交、社会主義圏への接近によって、国際市場におけるキューバの位置は大きく転換していった。このことはキューバ革命が、単なる反バチスタの政治革命にとどまるのではなく、物質的土台の変革にもとづきながら、大衆の意識をも変革していく社会革命へ進んでいくことを意味した。計画経済の導入と大衆意識の高揚が、社会主義革命のイデオロギー的宣言とともに、準備された。

こうした革命過程において、カストロは、「文盲を一年間で撲滅する」と教育の大衆運動を提起⁽⁸⁾、一九六一年を「教育の年」と銘じてこれと取りくむことにした。反乱軍の解放区におけるゲリラ体験を基礎に、革命政府の周到な物質的準備⁽⁹⁾をもって大衆教育運動が開始された。このとき、人民社会党 (Partido Socialista Popular—PSP) の書記長ブラス・ロカ (Blas Roca) は文盲一掃運動を、革命的ロマンティズムの最後の突進だと非難し、教育の大衆運動の必要性を低く評価、経済的優先の見解を主張した⁽¹⁰⁾。社会主義建設を前にしてさしあたっての国家的統一行動の重点を教育に

おおか、経済におくかという対立が、解放区のエ育体験をもつM-26-7の側と、伝統的マルクス主義の立場をとるPS Pの側との間にみられたが、事実この文盲一掃大運動が、キューバ革命を独自たらしめる道を決定したひとつであるといえる。

全国文盲一掃運動 (Campana Nacional de Alfabetización) は六一年四月から学校を一時閉鎖し、生徒・専門教師・人民教師など約三〇万人を自発的識字教師として動員して、約九八万人の農村に多い文盲者に働きかけたものであり、一年で文盲克服をほぼ達成した。文盲率は二三・六%から三・九% (約二七万人) へひき下げられた。キューバ人の四人に一人が参加したと考えられるこの大運動は、キューバ社会主義建設の人的・政治的・組織的基礎を、革命意識の高揚、読み書き能力の育成をはじめ種々の面にわたって創造した⁽¹¹⁾。それは子どもたちを新しく育成し、成人教育を持続させるキューバ革命の母胎ともいえる大衆運動であった。

この大衆運動の一方で、六一年一月、マルクス・レーニン主義のイデオロギー教育を中心にした政治的幹部育成を目的とする「革命教育学校」(Escuelas de Instrucción Revolucionaria—EIR) が創設された。キューバ革命が社会主義的性格を公けに宣言するのは六一年四月一六日であるが、しかし物質的諸条件の变革と相関する人間意識の变革については、その社会主義的性格の確立をある日付で区切ることはできないし、またそのような性格のものでもない。大衆による、社会主義イデオロギー形成は、革命の進行にともないながら種々の局面を呈する。

社会主義革命とは、資本主義的關係を否定的媒介にし、物質的諸力の変化に基き、社会的諸關係を社会主義的に轉換し再生産していく社会革命といえる。そこではたえず資本主義的残骸との闘争が展開される。そしてこのような社会革命を考察する場合には「経済的な生産諸条件の物質的転覆と……イデオロギー的諸形態とを常に区別しなければなら⁽¹²⁾ない。」イデオロギー的諸關係は、生産過程と流通過程の物質性によって再生産される生産諸關係とは媒介なしに、これ

らの過程の中で現存する⁽¹³⁾。そして「イデオロギーは、人間間の抗争から生まれるのであって、人間と自然とのあいだの抗争から生まれるのではない。」⁽¹⁴⁾従って、社会主義革命は、イデオロギーに対して、階級闘争の遂行という見地から極めて自覚的にとりくむ。それは、歴史を創造する人間と、その人間の意識を重視するからである。労働による生産・物質的資材の発展と、意識による発展、つまり「労働と意識」が社会主義建設において強調される。さらに「社会主義革命の思想が社会主義国家の思想に先行する」ことが、キューバの経験で確認される。革命の勝利後も階級闘争が持続する「過渡期」において、革命教育の運動を組織する必要があった。その革命教育は二つの側面に力点をおいて大衆に働きかける。つまり「青年のイデオロギー形成 (formación ideológica de la juventud)」と「成人のイデオロギー的変容 (transformación ideológica de los adultos)」である⁽¹⁵⁾。青年・成人のイデオロギー的教育はまず幹部育成の組織化から開始された。新しく権力を握った社会階級は、国家権力を行使し、国家機構・企業管理・組織活動を推進するとき、中堅幹部の不足を認識するとともに、革命的熱意にみちている大衆へイデオロギー上の考慮をはらう必要があった。

本稿は、キューバ革命過程において、幹部がどのように育成され、革命教育の運動がどう組織されていたのかを「革命教育学校」を中心に述べてみようと思う。それは「政治上の過渡期」に教育がいかなる規定をこうむりながら、移行・展開していくかを考察することである。政治と教育、革命と教育が対立概念ではなく、むしろ政治教育・革命教育をイデオロギー教育とともにどう統一し組織していくのかという課題が社会主義建設においては重要な位置をしめる。さらに革命教育の組織形態・内容が変化していくなかに、「政治上の過渡期」において教育学が対象としなければならない事実をおさえていこうと思う。

一 党建設と革命教育学校の創設

① 革命教育学校の開設

政治諸党派および革命組織を一つの傘下におさめることが、一九六〇年末のキューバ革命の中心的課題であり、とりわけ M-26-7 と PSP の対立の克服が事実上の眼目であった。政治的組織の統一によって「革命を統一すること」は、内外情勢と対応していくうえで、緊急の課題であった。社会主義革命統一党 (Partido Unido de la Revolución Socialista de Cuba—PURSC) にむけた過渡的組織として「革命統一組織」(Organizaciones Revolucionarias Integradas—ORI) が結成される⁽¹⁾。革命教育学校の創設は、この ORI 結成へむけての活動のひとつであった。

一九六〇年十二月二日、第一回 EIR 全国会議 (Reunión Nacional) が開かれ、カストロ、blas・ロカ、エミリオ・アラゴネス (Emilio Aragonés)、リオネル・ソト (Lionel Soto) をはじめとした、M-26-7 と PSP の幹部と⁽²⁾、開校以前に決まっていた一九人の EIR 幹部が集まり、六一年一月の開校について討議した。そして、六州に一一校の⁽³⁾「州革命教育学校」(Escuelas Provinciales de Instrucción Revolucionaria—EPIR) をおき、「ニコ・ロペス国立学校 (Escuela Nacional de Inst. Rev. "Nico López")」をハバナに開設することにした。七〇〇人以上の幹部と活動家が学生として選ばれたが、そのメンバーは M-26-7 と PSP が五〇% ずつを占め、革命幹部団 (Directorio Revolucionario) に属する者はわずかであった。州革命教育学校は三か月間、ニコ・ロペス学校は六か月間を教育期間とした。EIR の組織上の指導権は M-26-7 が掌握していたが、専任講師および他の時間講師は PSP のメンバーがほとんどを占めていた。これは訓練されたマルクス・レーニン主義者を組織的に PSP がかかえていたためである。

こうして開始された EIR の「基本的な任務 (la fundamental tarea)」は「革命家のイデオロギー形成と、それによる、人民のイデオロギー形成」(la formación ideológica de los revolucionarios, y, a su vez, del pueblo) と最後まで一貫して考えられた任務・目的であった。革命の行動に関する理論的認識、社会主義的意識 (una conciencia

socialista)を創造することが主に考えられ、キューバ革命の指導者たちの理解するマルクス・レーニン主義思想によって、新しい幹部を育成することが意図されたのである。EIRは、社会主義宣言が公表される四か月前、さらにカストロ自らが「私はマルクス・レーニン主義者である」と言及する一年前にすでに開校していたことは、注意しておいてよい。

カストロの「革命イデオロギー」は、一九五二年のモンカダ兵営襲撃に始まり、そこに凝集して強調されていると考えられる。そしてカストロ自身の革命教育の試みは、五三年ピノス島の獄舎で開かれた「アベル・サンタマリア・アカデミー」⁽⁴⁾でなされた。カストロ指導下の革命の正しさと必要性を説くことが、ここの教育の目的であった。その後、解放区のゲリラ活動のなかで、兵士や農民・子どもたちのために種々の実際的な教育活動が展開された。解放後のキューバ「革命教育」はこの解放区の活動を直接の土壌にしているが、EIRの革命教育は反乱時のこのような教育活動の延長上に位置するものではなく、権力獲得後、革命の継続のために必要とされた組織的対応策として全く何もないところから新しく組織されてきたのである。したがって、イデオロギー的な教育・訓練を大衆に広範に普及していくことを目的とするより、むしろマルクス・レーニン主義によって幹部を養成することがEIRの活動であった。

大衆のイデオロギー的変容と、幹部のイデオロギー形成は異なったものとして開始され、その後、幹部―大衆の関係をいかに創造し変革していくかということに、イデオロギー闘争の課題がかかわってくる。開校当初、EIRは、党建設にむけた過渡的組織であるORIの組織的対応として、政治的に創設された革命教育機構であった。そして、指導者が組織的に必要とみなしたものを学生として選択し、カストロの演説、ブラス・ロカの著作⁽⁵⁾、ソ連文献の翻訳書等を教材にした教育を実施したのである。

第一期の卒業生たちは、マルクス・レーニン主義の古典に親しむことも少なく、EIRの諸欠陥を自覚することもな

かったが、素朴な革命的情熱によって、EIRの拡大と州におけるORI組織化に大きな貢献をもたらした。

② 革命教育組織の発展

革命教育基礎学校 (EBIR) の設立——EPIRは、地域的な州単位につくられていたが、そのほかに新しい革命教育学校の形態の創設が六一年四月一六日の第三回全国EIR会議で決定された。それは、大工場、砂糖センター、人民農場、協同組合、管理局等の生産単位に設立される「革命教育基礎学校 (Escuelas Básicas de Instrucción Revolucionaria—EBIR)」である。EPIRが政治的組織の見地から設立されたのと異なり、EBIRは広く大衆的にマルクス・レーニン主義を習得させ、反革命分子との対立や革命建設に自覚的な大衆を創出する大衆的性格をもつ学校であった。反革命の武装侵略 (プラヤ・ヒロン侵攻) や農業・経済改革の大衆的参加の事態をむかえて、旧い大衆の政治観とのイデオロギー闘争が問題となっていたからである。六一年五月一五日に、最初のコースが、全日制 (internas) 寄宿学校と、午後・夜間の半寄宿制 (semi-internas) の二形態で開始された。前者は四五日、後者は六〇日を教育期間とした。EBIRのシステムは急速に広がり、六一年六月二一日の第四回全国会議までに一六九校、同年九月には二六三校、約九五〇〇人の学生が参加していた。

外国の敵と国内の反共的偏見に対するイデオロギー闘争の展開をとおすなかで、社会主義宣言以降の新たな政治情況と、科学的社会主義思想の普及とが結合され、大衆がマルクス・レーニン主義思想で武装されることが、革命教育のイデオロギー的配慮と考えられた。革命が一日や一年で終るものでない長い過程を要するものであり、そして革命がすでに完成されたという幻想を決してもってはならないと学生に教えることが主張された。

革命教育国立学校 (ENIR) の設立——六一年から六二年の数か月の間に急速に拡大したEIRの機構は講師不足の状態をもたらしたため、六一年夏に、EPIRとEBIRの講師の研修センター機能をはたしながら、他方、教育省

により選ばれた学校教師・管理職の養成を行なう「ルーベン・ブラボ国立学校」(Rubén Bravo Escuela Nacional)を創立した。これにより、これまでの党や政府の政治幹部養成が目的であった「ニコ・ロペス」国立学校と異なる、大衆組織の重要な地位にある幹部にマルクス・レーニン主義教育を施す新しい「国立革命教育学校」(Escuela Nacional de Instrucción Revolucionaria—ENIR)の形態が設立されていくことになった。

大衆組織に対応する〈学校〉がつぎつぎに設けられていった。すなわち、「カルロス・ロドリゲス・カレアガ」(Carlos Rodriguez Careaga)、「学校はCTC-R (革命的キューバ労働組合)の全国・州幹部のために」、「フリオ・オントニオ・メリヤ」(Fulio Antonio Mella)、「学校はCTC-Rの地区幹部のために」、「アンドレス・ゴンザレス・リネス」(Andrés Gonzalez Lines)、「学校は漁民のために」、「シエラ・マエストラ」(Sierra Maestra)、「学校は人民農場の労働者のために」、「フェ・デル・ヴァリエ」(Fe del Valle)、「学校はFMC (キューバ婦人同盟)」、「ファン・ロンダ」(Juan Ronda)、「学校はCDR (革命防衛委員会)」、「ニセト・ペレス」(Nicteto Pérez)、「学校はANAP (小農全国協会)のために」つくられた。

これらENIRはすべて寄宿制で、規模や教育期間、教育水準はそれぞれ独自にくまれていたが、共通の目的は、反共的偏見から大衆組織を守るだけでなく、新しい情勢や局面にたいして能力ある活発な幹部を、マルクス・レーニン主義の諸原理を基礎に育成して、組織に送りかえすことであった。

こうしてEIRの機構は、①ENIR、②EPIR、③EBIRの三形態の骨組を六二年末までに確立した。革命教育が組織的に発足してから二四か月の間に、ENIRは一校から九校に、EPIRは一一校から七校に整備され、EBIRは〇から二〇〇校以上に、講師は一九人から五〇〇人に、学生は七〇〇人から一万人へと増加し、その計画も強

化・洗練・改善されていった。六三年からは、規模の量的拡大よりも、質の充実に主要な目標が与えられる。

しかし、EIRは、六二年六月に政治組織における党派主義と官僚主義の抬頭に関連して、カストロから激しい批判をうける。これは、EIRそのものが、イデオロギー闘争の渦中に投げられたことを意味し、さらに幹部政策と大衆政策が結びついていく上での厳しい試練でもあった。

③ 一九六二年六月の批判

六一年後半から六二年前半にわたってORIの組織活動は急激に展開された。中でもPSP幹部は、伝統的な組織能力と政治的手段を駆使し党派的な勢力拡大をすすめた。このPSPの動きに対してカストロは六二年三月三度の演説で、公然とORI内部の党派主義を批判した。ORIが「セクト主義の温床」「日和見主義者の天国」「権力篡奪者の官僚主義」にぬりかためられ、何よりも大衆の信頼を失墜した「ごみくずの山」になっているという激しい内容であった。カストロの攻撃目標は、党地区委員会幹部や政府機構内部の中堅幹部でなく、ORI書記長でPSPの中央幹部であったアニバル・エスカランテ (Anibal Escalante) であった。

PSPは、党派勢力拡大にEIRを利用し、ORIの問題をEIRにもちこんだのである。六二年六月二七日、第七回全国EIR会議の席上でカストロはEIRの「ある誤り」を三点にわたり批判した。⁽⁷⁾

(1) 学生の選択がORIの州細胞・地区細胞の掌握下にあり、党幹部の党派的选择と個人的出世のための選択がおこなわれ、革命的態度や行為が破壊され、官僚主義を助長した。(2) 教育方針や講師陣に、ORIが政治的官僚主義をもつて干渉し、革命教育に混乱と浪費をもたらした。革命指導者や講師は、最良の幹部を育成するために、あらゆる組織の可能性を開いておかねばならない。(3) 学生も講師も関係者も、EIRを個人的昇進の道具につかってはならないし、その卒業生は特別な優越感にとらわれてはならない。

カストロの批判は、EIR解体寸前の危機的情況をもたらすほどであったと、リオネル・ソトは懐古しているが、それを克服して次のような再編が実施された。

(1) 人事・管理・監督の責任はEIR全国指導局(Directorio Nacional de EIR)に集約され、この全国指導局がORIの全国指導局に責任をもつ。(2) EBIRに参加する学生は、各労働者センターにおける最良の労働者たちからなる革命細胞が指名し、学生となる前に公けの委員会承認されなければならない。(3) EPIRの学生は、80%をEBIRから選択し、20%は州のORIが自らの幹部の中から選ぶ。(4) ニコ・ロペス学校の学生の80%は、EPIRの優秀な学生から選択し、20%はORI全国指導局が党から選択する。他のENIRは、各組織の関係者から選ぶ。この選択の指導はORI全国指導局がおこなう。(5) EIR全国指導局の管理下にある学校のみが、EIRと確認され、大衆諸組織が非常設に行なっていた学校は、「革命教育サークル」(Círculos de Instrucción Revolucionaria)に変更する。(6) 学校の日程を固定化し、EPIRは各州に一校、都市のEBIRは夜間課程に、農村のEBIRは小農と農業労働者のみに与えられるなど均一の処理しやすいシステムにかえられた。

六二年のこの諸改革は、EIRが狭い政治的干渉にまどわされないようにし、さらに革命の政治的装置へ大規模に関わるよう革命教育機構を再組織したものである。党とEIRが分割されることでより活動的となり、中央集権化される構造的改革であった。

二 技術革命と革命教育学校

① 技術革命の提起

六二年の政治的危機の年につづいて、六三年は経済戦略の再考の年であった。革命初期の経済政策における指導原則

は、農業生産物の多角化、工業化の推進、新しい貿易国の開拓であったが、国際収支の赤字、技術者、管理者、熟練労働者等の種々の資格ある労働力の不足が六二年に顕在化し、工業化は悪化、農業多角化は生産性の衰退を兆した。革命の経済的危機は、経済発展の新戦略をみいだす必要をうみだした。農業生産の専門化の道がとられるべきだと考えられ、砂糖と家畜に主眼がおかれた。⁽¹⁾ 単位労働、単位土地面積当りの生産額を大幅に高める「合理化と機械化」、農業発展をすすめる技術学の発展の緊切性が、「技術革命」(Revolución Técnica)の提起を促し、新しい経済戦略は、政治的危機の克服と相関しながら大規模な機構改革を実施させ、高度の中央集権機構がつくられた。⁽²⁾ 六三、六四、六五年は、革命後の移行期である。そして、その移行期の中心課題は、社会主義建設における「技術革命」の遂行であった。

社会全体の目標と技術政策が一致することにより、技術はその力を発揮する。キューバ社会主義革命のように、統一的国家計画が「精神的刺激」を起動力にすすめられる環境では、技術革新はイデオロギーと切りはなして考えられない。技術を社会に奉仕させるためには社会を掌中におさめ、抑圧者を打破し、社会的諸条件を変革し、技術者と技術を人民にひきわたさねばならないと考えられた。技術政策と人材養成政策は、教育革命と結びついて展開されるが、ここではEIRの動向に即してのみ考察する。

すでに六三年までに、八万七〇〇〇人の学生をEIRは育成し、マルクス・レーニン主義の学習を目的としてなしたげた大衆的結果は達せられた。次に技術革命の遂行の下で、キューバ現実を分析する新しい革命教育の局面が提起されたのである。

② 政治-技術シクロ (el ciclo político-técnico)

六三年一月二日から二月一日まで開催された第一〇回全国EIR会議において、教育期間延長の政策が決定された。EIRは三か月から五か月に、EPRIは五か月から九か月に、ニコ・ロペス学校は一〇か月半から一五か月

に延長された。そして「政治―技術シクロ」⁽³⁾(el ciclo político-técnico)と呼ばれる革命教育の新局面が開始されることになった。学生は、マルクス・レーニン主義の教材を使用して、地区・州における党の組織的な発展計画とキューバ経済の開発可能性とを結合して学ぶ。学校は「技術革命の意識」(la conciencia de la revolución técnica)に寄与し、党员と前進した労働者の目を技術科学の王道へ開く任務をおびたのである。六四年の第一二回全国会議では、革命教育が、マルクス・レーニン主義の教育、一般文化の諸要素、農業・畜産の技術学の三者が結ばれて「政治―技術シクロ」に発展していることを確認し、さらにその強固な推進を決定した。学生たちは、単に教材で学習するだけでなく、農業労働や工業労働に実際に関わりながら理論的学習をすすめた。

この新局面は、技術的に高まった幹部の育成へ学校の役割が転換したのではなく、むしろ、技術学的能力を身につけたマルクス・レーニン主義者を育成する役割が強化されたことを意味した。六四年九月、カストロは、「政治―技術シクロ」への移行について次のように述べた。

「革命当初の段階で……革命の諸問題にかんする理論的自覚と我々が呼んだものが獲得されはじめた。……社会変革の必要性和不可避性が理解されはじめた。政治的諸原理と諸哲学が深く研究されはじめた。国際情勢とそこでの各国の位置が理解されはじめた。

これは、我々が革命のための理論的準備を獲得しはじめ、革命教育学校が機能しはじめたことである。——マルクス・レーニン主義の研究が開始されたのである。数千、数万、数十万の者が歴史の問題、歴史の弁証法的概念を理論的に理解しはじめたのである。つまり、古くから諸階級に分割されている社会現象を理解しはじめたのである。……

我々は、理論的見地から自らを強化してきたが、いまや我々は実践的見地から自らを強化していかなばならない。

我々の革命教育学校は、数万、数十万の市民のイデオロギー形成に貢献することによって、イデオロギー的な間隙を

うめてきた。そして、今や革命教育学校では、理論に加えて、生産の技術に関係した諸問題がその中に含まれつつある。即ち、技術教育の諸要素が革命教育学校に導入されつつある。⁽⁴⁾

カストロは、技術革新に貢献し、生産性を高める重大な責任をEIRがなうことを主張した。そして六五年には、EIRの技術革命における役割が明確にされ、技術・政治教育の形態が三つに定型化されて実施されることになった。⁽⁵⁾

1 マルクス・レーニン主義を第一の課程におく学校：キューバ共産党 (Partido Comunista de Cuba—PCC) の「ニコ・ロペス上級学校」(Escuela Superior)——二年、通学制。青年共産主義者同盟(Unión de Jóvenes Comunistas—UJC)の「フルヘンシオ・オロス上級学校」(Escuela Superior “Fulgencio Oroz”)——一年、寄宿制。PCCのEIR——一年、寄宿制。教師のための「ルーベン・ブラボ」ENIR——一年、寄宿制。

2 技術・文化を第一におく「政治・技術シクロ」課程の学校：寄宿制のEBIR——一年。

3 マルクス主義の学習と技術学・文化水準の向上に同等の比重をおく学校：CTC—Rの「フリオ・アントニオ・メリヤ」、ANAPの「ニセト・ペレス」、CDRの「ファン・ロンダ」。ENIRは一年間の寄宿制。都市の労働者のためにEBIRの夜間学校が五か月の教育期間。

六五年の間に、EIRの内容は農業発展に奉仕する技術教育へ移行し、農業幹部の職業的訓練がEIR計画の絶対に必要な部分をしめるようになった。政治・技術シクロは、革命戦士が技術の重要性を自覚する上で、これまでの限界を克服するのに役立った。技術学を知った幹部の育成は、政治と技術の統一に、EIRが貢献したことを意味した。特に党の幹部や戦士(militantes)にとって、生産と技術の諸問題に十分な知識をもつことで、労働者や農民と直接に関わることが要求されたのである。「生産から党へ、党から生産へ」という新しい幹部の新しい態度が、運動として広がっていくようになる。こうした、マルクス・レーニン主義と技術学の結合した教育がなされていく中で、EIRはその技

術的性格の比重を強めていく。それは、EIRが、農業技術訓練センターへと転換していくことであった。

③ 農業技術研究所 (Instituto Tecnológicos Agropecuarios)

すでに「政治・技術シクロ」では、技術学の重要性を現実的に獲得していくうえで限界に達していた。農業幹部の職業訓練が第一に考えられるようになった。これは、キューバ教育機構における技術学校が、党建設を目的として開校されたEIRと、農業技術者の育成という国家的課題の中で融合していくことであった。それは、一九六四年、EIR全国指導局において、カストロの農業技術学習の運動を組織する提案によって、「土地・肥料・畜産の技術教育計画会議」(Consejo del Plan de la Enseñanza Tecnológica de Suelos, Fertilizantes y Ganadería)が開かれたことに始まる。一九七四年までに四万人の中等レベルの技術者を多様な農業活動の諸分野において育成する計画であった⁽⁶⁾。

人民農場の農業労働者のためにあった「シエラ・マエストラ学校」(ENIR)が技術訓練センターに転じた。農村のEBIR寄宿学校は、形式的にはEIR機構に残っていたが、小農のために、新しい農業・畜産技術を基礎的にほどこす「農村基礎中等学校」(Escuelas Secundarias Básicas Rurales)へ転換した。六五年、七〇の「農業技術研究所」(Institutos Tecnológicos Agropecuarios)がハバナ州に設立され、「カミロ・シエンフエゴス学校都市」も、この「技術計画」に基づき、農業技術の性格をもつ「センター」(centro)へと転換した。こうして「農村基礎中等学校」(三年間)を第一段階とし「農業技術研究所」(四年間)を第二段階とする農業技術者育成の機構がつくりだされていた⁽⁷⁾。

これら新しい農業技術教育のためのセンターは、高度の革命的意識をもった農業専門家の形成を目的とした。「計画会議の技術研究所の機構は、単に我々の農業に関する諸問題を戦略的に解決するだけでなく……教育されている者たちの政治的・知的・道徳的・美的・肉体的形成のためのセンターでもある。我々は技術研究所を、共産主義者・高度の政治的水準をもった研究者を形成し、……真の革命的技術者を生産する場と考えている。」(Soto)これは、農業問題の政治

的重要性を示しており、この大衆的計画がEIRの指導の下で、主に遂行されることを示している。これまでの社会主義的経験の弱点であった農業部門において、社会主義と共産主義が勝利しうることをキューバが証明する、農業と革命の推進が統一して考えられた。

このようなEIRの機構転換は、革命の前進の過程でなされたものであるが、EIRの別の特殊な活動である「社会調査」も、こうした転換の事態の中で提起されていった。

④ 社会調査 (las investigaciones sociales)⁽⁸⁾

キューバ労働運動、砂糖産業の実態に関する研究によって開始された社会調査は、経済学、歴史、方法学、社会学、哲学の各分野ごとに、「キューバ自身の現実」を調査・研究することを主要な目的としていた。六五年「社会調査研究全国委員会」(Comisión Nacional de Investigaciones y Estudios Sociales de las E. I. R. del P. C. C.)が設立され、各分野ごとに、州と国のそれぞれのレベルで分科委員会が六六年までに設立された。

これまでキューバの経済・社会・政治に関する研究は、資本主義的見地から行なわれたものであったにすぎなかったため、キューバ革命を遂行する見地からの新しい調査・研究が必要であった。キューバの現実に関する基礎的な事実と資料を提出し、政策の企画や、指導・教材の手段として用いられる印刷物を作成することが求められた。さらに、社会主義諸国の成果を、形式的・教条的・機械的に適用するのではなく、キューバの現実に根ざした正確な知識を学生に提供するように要求されたのである。

新しい調査が次々と企画され実施された。例えば、哲学研究委員会は、「キューバ哲学史」や「社会主義建設の哲学的諸問題」等、史的・弁証法的唯物論の問題を中心に、EIR幹部の高度な理論形成の課程に役立つ教材などを研究した。方法学調査研究委員会は、主にマルクス・レーニン主義教育の方法論と教授法について、「教育の諸原理」等を研

究し、党学校の教育の発展に役立てようとした。社会学調査研究委員会は、一九四五年に Lowry Nelson によってなされた“Rural Cuba”の検証をかねた調査を一二の農村地域において実施し、ユネスコの余暇時間とレクリエーションに関する世界調査をうけもったりした。歴史調査委員会は、キューバ共産主義運動史、キューバ労働運動史、M-26-7の歴史、五二年から六五年の革命運動年表作成、等の調査・研究を行なった。経済調査委員会は、砂糖・畜産・酪農の経済的現実一般にわたる研究をすすめた。これら調査研究の成果は、出版されたり、『理論と実践』誌(Teoría y Práctica)に掲載されたりした。

この社会調査は、EIRの行政幹部のみでなく、大学、各省、中央企画局等から募られた者も加わり、専門的研究の立場と管理的責任の立場と半数ずつのスタッフをもって活動が遂行された。EIRの学生たちは、補助・半専門家として幹部に同行した。

社会調査の実行をとおして、ソ連・東欧の実践がそのままキューバの政治的発展上の必要にこたえるものではないことが確認され、「キューバの道」を創造する重要性が自覚されていたのである。この調査は、革命運動を強化し、鮮明にし、指導していく「革命的調査」の性格をもち、キューバの道を追求する現実的な科学的調査を裏づけにもつことによって、革命教育の内容はより深く前進したといえる。外国の技術・研究への依存心を断ち、意識の高揚をうながしながら、さらに、農村と都市の対立解消を急速にすすめていくために、技術革命における技術教育と相関した社会調査活動は、EIR機構が閉鎖された後も展開していく。

⑤ 学生、教師、カリキュラム

学生の水準の低さが、EIR開校から大きな問題であった。EIRは、かつて急速に開始されたため、種々の欠陥をかかえていた。学生は文盲を克服したばかりの者が多く、例えば六三年に六学年以上の学生はEPIRで二一%、

表 1 EIR 学生の階級構成 1962 と 1966

卒業生数		工業労働者	農業労働者	小農	労働者階級
ENIR	1962	13.6%	66.0%	2.3%	81.9%
	1966		55.6%	18.7%	74.3%
EPIR	1962	24.1%	9.8%	3.4%	37.3%
	1966		65.8%	9.1%	74.9%
EBIR	1962	28.6%	14.9%	4.6%	48.1%
	寄宿 1966	27.1%	52.5%	14.5%	94.1%
	夜間 1966		52.1%	6.6%	58.7%

Note: Richard R. Fagen, 'The transformation of Political Culture in Cuba', (Stanford, 1969), p. 132.

表 2 EIR の卒業生数 1961—66

	EBIR	党の EPIR	UJC の EPIR	ENIR	合計
1961	16,661	2,061	219	18,941
1962	31,070	1,580	3,750	36,400
1963	25,524	1,532	880	3,759	31,695
1964	19,100	879	610	2,125	22,714
1965	15,101	797	358	708	16,964
1966	16,276	779	609	17,664

Note: 1961年, 62年, 63年は Lionel Soto, "Las Escuelas de Instrucción Revolucionaria en nueva fase," Cuba Socialista, No. 30 (Feb. 1964) p. 75, 1965年は Lionel Soto, "El quinto aniversario de las Escuelas de Instrucción Revolucionaria," Cuba Socialista, No. 53 (Enero. 1966) p. 85, 1964年, 66年は Richard Fagen; The transformation of Political Culture in Cuba, (Stanford, 1969) p. 226.

EBIRでは一八・七％にすぎなかった。⁽⁹⁾彼らにとって、ソ連のテキストやマルクス・レーニン主義古典は、読むだけで難解であつたうえに、キューバ現実に即していないということでも尚のこと困難であつた。政治・技術シクロ以降、非政治的な内容の課題が教育水準をあげるために導入されたが、EIRはその七年の間ほとんど読み書きできない学生をうけいられてきた。これは、労働者階級出身の学生をふやすという政策によって実施されたのである。

〔表1〕は、EPIRとEBIRで労働者階級のしめる割合が六二年に比べ六六年では極めて高くなっていることを示している。低い社会階級に属した者の選択に成功をしたといえるが、この成功の裏には、キューバの社会的・政治的現実に直接有利に役立ちうる人材を育成できなかったことを意味している。

表 3 州別の EIR 学校数と生徒数 1965年

	EBIR 夜間		EBIR 寄宿		EPIR (UJC)		EPIR (PCC)		計	
	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数
ピナル・デル・リオ州	6	427	3	385	1	83	1	74	11	969
ハバナ州	82	6,067	2	64	1	52	1	264	86	6,447
マタゾンザス州	11	836	1	168	1	34	1	108	14	1,146
ラス・ビリャス州	36	2,079	6	422	1	67	1	124	44	2,692
カماغェイ州	44	2,427	2	381	1	57	1	100	48	2,965
オリエンテ州	10	888	12	957	1	65	1	127	24	2,037
	189	12,724	26	2,377	6	358	6	797	227	16,256
ENIR									9	708
									236	16,964

Note: Lionel Soto, "El quinto aniversario de las Escuelas de Instrucción Revolucionaria," Cuba Socialista, No. 53 (Enero. 1966) p. 84.

さらに農民よりも、工業・農業労働者に重点がおかれていた。これは、「表3」の州別の構成とあわせて考えると、ハバナ州の都市に学校・学生が集中していることから、幹部の革命教育は都市労働者の組織に力点がおかれていたと思われる。

「表2」によると、卒業者数は、六二、三年に急速に増加し、以後固定するか減少するかの傾向にある。これは、組織的にEIRが確立されたとともに、質の充実に重点がおかれた結果であるといえる。EIRに関わった学生は、EBIRの総計である一二万三七三二人以上、全総計の一四万四〇〇〇人以下であると考えられる。

「表3」は、EBIR夜間が都市、EBIR寄宿が農村と、各州ごとにアンバランスであるが、EPIRは、UJC、PCCとともに各州ごとに生徒数の均衡がとれている。なおUJC（青年共産同盟）のEPIRは六三年以降創設されたものである。

さらに、学生の構成は六三年、六五年において党員は約二七％、三五歳以下の青年が七〇～八〇％を占めており、婦人は六三年ではEPIRが一二％、EBIRは二三％、六五年にその

表 4 1966年末の 573 人の指導者・教授の構成

25歳以下	39.4%
26～30歳	30.0%
31～35歳	15.5%
36～45歳	11.6%
45歳以上	3.5%
性 別	
男	84.5%
女	15.5%
職 業	
知識人(学生, 教員)	13.4%
サービス業, 商業	34.6%
工業・農業労働者	45.5%
農民	6.5%
組 織	
M-26-7	19.0%
PSP	4.7%
革命幹部団	1.0%
青年社会主義者	2.3%
未組織者(革命勝利時)	73.0%
1966年の政治的参加	
党員	82.7%
UJC	8.4%
未加入	8.9%

Note: Richard R.Fagen, "The transformation of Political Culture in Cuba." (Stanford, 1969) p. 134.

比率はややさがっていると考えられる。青年幹部の育成が、中心であった。講師は、よく訓練された革命家ではなく革命的情熱に充ちた者からなりたっていた。「表4」をみると、年齢的には三〇歳以下のものが六九・四%を占め、男子が八四・五%である。職業では、サービス業・商業と工業農業労働者が八〇%を占め、知識人に重点がおかれていないということ、農民にはまだ力量が不足していたということがうかがえる。PSPの者が圧倒的に少なくなっており、革命勝利時の未組織者が七三%をしめていることは、新しい指導者・教授が多いということである。また、党員が講師の中心であったのは、当然といえよう。

講師の教育水準は、学生よりもやや高かっただけで、その水準をひきあげるために、特別の学期末講座と学習サークルがつくられた。また、EIRの幹部を教育するため「マルクス・エンゲルス・レーニン学校」が、六年一月に設立された。学生・講師をみると、これはアカデミックな内容よりも政治的なものに比重がおかれ、知的業績よりも知的可能性の方へ重点がおかれて構成されていたと思われる。

れる。

教材に関していえば、キューバの現実に即したマルクス・レーニン主義文献がなかったということが最大の欠陥で、わずかにカストロとブラス・ロカの著作があったが、ソ連の翻訳とマルクス・レーニンの古典が用いられた。

六二年一二月に行なわれた学期末講座によると、EIRの教育内容の特徴が理解できる。⁽¹⁰⁾ 講座は三コースに分かれて、①基礎講座 (El Cursillo Basica) には三一七人が参加し、『共産党宣言』、ソ連の『マルクス主義哲学の基礎』、『マルクス・レーニン主義教科書』、毛沢東『実践論』、エンゲルス『空想と科学』、レーニン『国家と革命』など基礎理論のテキストを使うとともに、キューバ革命の中から生まれた『モスクワ宣言』と『第二ハバナ宣言』がテキストに用いられた。②中級講座 (El Cursillo Medio) には七二人が参加し、マルクス『ゴータ綱領批判』、『フランスにおける階級闘争』、『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』、レーニン『国家と革命』、『唯物論と経験批判論』、ア・プレハーノフ『歴史における個人の役割』が使用され、それに前記キューバ革命の二文献が加わる。③上級講座 (El Cursillo Superior) には三二人が参加し、『資本論』の商品・貨幣・絶対的剰余価値と相対的剰余価値の部分、『唯物論と経験批判論』、それに前記キューバ革命の二文献であった。

三 革命教育の転換

① 革命教育学校の閉鎖

一九六四年に、EIRの幹部を教育するために設立された「マルクス・エンゲルス・レーニン学校」が、六五年一月に、「ニコ・ロペス学校」へ統合された。CTCRの二つのENIRは、一つへ統合され、UJCのEPIRは機能を停止し、FMCのENIRも閉校した。六六年一月には、CDRのENIR、教師の「ルーベン・ブラボ学校」

も閉鎖された。そして六七年十一月から六八年二月にかけてEIRの全機構は姿を消していくのである⁽¹⁾。

これは、革命教育を学校として特別に組織し、その形態をもって教えるという段階が終ったことを意味している。確かに、幹部が不足しているとき緊急にそれを養成する組織が必要であった。党建設の組織化に貢献するときは、党員の意識を高揚すべくEIRは機能した。大衆がマルクス・レーニン主義を求めたときEIRがつくられた。技術革命が焦点となったとき、技術教育の役割になった。社会調査を必要としたときには、特別の委員会が調査のために形成された。革命課題と密接に結びついて革命教育の運動が、革命教育学校で組織されていた。しかし、六五年以降の革命教育学校の転換は、革命教育がマルクス・レーニン主義の文献を手がかりになされるというのではなく、実践面が重視されてきたとともに、具体的な技術訓練が問題となってきた。理論と現実との間隙は、ただマルクス・レーニン主義文献を読むだけでは不十分で、「革命それ自体を革命家の教師」にする革命教育の方法が、実践的に求められてきたのである。革命的情熱が政治的に重視され、マルクス・レーニン主義の理論で武装された幹部は、さらに技術に精通した幹部となり、最終的には、農業専門家の育成を第一に考えるようになった。こうした幹部教育は、「政治」から「政治技術」そして「技術」へとその内容を転変してきた。キューバにおけるこの展開は、革命教育を学校形態で組織する、革命の歴史的なある局面が必要であったことを物語っている。そして、その局面とは幹部のイデオロギー形成が中心であった。幹部がある程度量的に育成されると、革命教育は質的な転換をもたらしはじめる。それは革命教育が、青年を世代的に育成する長期の教育計画のなかで考えられるということと、幹部の過剰が別の問題を発生させてきたということである。政治上の過渡期における転換は、かならずやイデオロギー闘争をとまなう。六七年の反官僚主義闘争は、革命教育の質的転換がより大衆化していく過程でのイデオロギー闘争であり、この中から教育的課題があらためて再認識されてきた。

② 反官僚主義闘争

六七年三月、PCCの機関紙「グラマ」(Granma)に「官僚主義との闘争は決定的な任務である」と題する社説が掲載された。⁽²⁾ アルマンド・アルトが書いたといわれるこの論文は、キューバが直面した社会主義国家内の官僚主義の本質にふれる重要な点を分析している。資本主義制度の遺物である官僚主義は、革命国家内にも抬頭する危険があり、それは、行政要員の過剰⁽³⁾だけから生じるのではなく、プチ・ブルジョア的思考方法から生じる思想上の問題であると考えられた。とりわけ、社会主義革命の勝利後、労働者や農民が生産手段に影響する決定や政治的解決に関わる関係がつくりだされたため、「生産の管理および国家の物的・人的資源の統括と管理に」官僚が介入するようになった。

「国家が制度として存在するかぎり、そして組織と管理と政策とが全面的に共産主義的性格のものにならないかぎり、市民の中の特殊な階層が国家を指導し管理する官僚装置の中枢部に形成される危険はいぜんとして存在する。」

と過渡期にあつては、社会主義革命が意識的に展開されないならば逆行しうることもあると考えられたのである。特筆すべき分析は、官僚主義を筋肉労働と頭脳労働の分裂がうんだ最悪の結果であると根源からおさえている点である。そしてこの分裂が生んだ科学・技術の発展という結果を積極的にうけいれ、行政施策上の反官僚主義対策にとどまらない根本的対応策が提起される。行政上の地位の流動性や生産現場の技術的・具体的問題と密着する行動的な行政の確立が考察される一方、官僚主義の思想的根源を断つ方法が考えられる。それは大衆の反官僚主義的自覚の高揚、「自己改造、技術訓練、生産の任務、とくに農業への大衆の参加をめざす闘い」が提起された。都市の党員・技術者・専門家・教師・労働者を農村地域に送りだし、農村における技術者・労働者不足を克服し、党の強化をすすめながら、農村での精神的刺激・労働の革命的体験を獲得させていくという路線である。

農村体験の革命的性格は、大衆運動としてはすでに六一年の文盲一掃運動で確認されており、革命教育においても六

五年一月末の第一三回全国EIR会議で、「政治教育は農村における労働によって遂行される」と決定されていた。⁽⁴⁾ 農業・技術の進歩は、都市を中心とした反官僚主義のイデオロギー闘争をへて、都市と農村、精神的労働と肉体的労働の分裂を克服する過程と切り離すことができない。とくに青年を育成する過程で、官僚主義的精神の抬頭する余地を遮断すべきだという配慮がなされた。

「学校が農村へ」(Escuela al Campo)計画は、毎年数千人の若者が教育と生産的農業労働へ参加することを結合する目的で六五年に提起されたが、具体的実践において遂行されたのは六七年の反官僚主義闘争をへていくなかである。⁽⁵⁾ 青年のうちに新しい社会において残存する思想的要因を一掃することが考えられた。

したがって革命教育は、新しい人間をどう創造するかという世代上の問題へかかわっていく。

③ 革命教育と新しい人間

革命教育は、「教育と社会的実践」の結合を創造していくもので、革命の諸任務に、学生生徒が大衆的に参加するよううながし、社会変革のなかで人間意識の変革を行ない、人間の完全な形成を目標とすると要約される。教育過程の内容は革命教育にあるとされ、教育機構の中央集権化と、青年および労働者大衆の戦闘的闘争状態を前提として人間的性格が形成されると考えられた。⁽⁶⁾

革命教育の運動と組織化は、その革命教育学校形態の設立ではなく、「統合教育(Educación Integral)」としての教育全機構の組織化と、学校外の運動化へとすすめられた。⁽⁷⁾ ゲバラの言葉でいえば「社会全体が学校となる」教育構造をつくりだすことであり、「新しい社会主義的人間」を形成することである。これは、生産の社会的諸関係を変革して、労働過程に参加することで創造的な歓びをもてるか、あるいは必要とされる仕事をすることで社会的充実感をえられるかという、労働過程そのものが本質的に報いられるようになることを目的としている。教育が新しい社会主義的人間を

創造する過程の中心であると考えられた。

新しい人間の形成と技術の発展が、建設の二本の柱となった。

六七年、「技術研究所」は一二校になり、さらに、特殊な専門農業技術を施す新しいセンターが三校設立された。それは、①かんきつ類の研究所で「青年の島 (Isla de la Juventud)」と銘され二〇〇〇人の奨学生が収容された。②コーヒー技術研究所「東部第二戦線 (Segundo Frente Oriental)」二〇〇〇人、③「森林 (Forestal)」技術研究所、五〇〇〇人である。

技術研究所は、革命軍と党の監督下におかれ、社会調査・研究は、科学アカデミーやハバナ大学の研究グループによってすすめられている。「ニコ・ロペス学校」は「全国党学校」へと再編され、時おり数十日間の管理・行政のための教育課程が設けられている。

革命教育の組織は転換して、新たな視点から考察される必要をうみだしていった。

六七年以降の革命教育の組織的・内容上の転換は、新しい教育活動・教育組織を対象にせねばならない別稿を要する大きな課題である。キューバ教育は、革命以降大きく三つの結節点があるといえよう。第一は一九六一年の文盲一掃大運動で、自由主義的改革が革命的性格へ転換したことであり、第二は六三年の組織構造の再編と六四年の教育内容の改革により六五年以降の技術教育を可能ならしめていく過程であり、このなかから「新しい社会主義的人間の形成」が教育革命の中心環として提起された。第三は、六七年の教育統合組織の確立で、これにより以前から提起されていた新しい教育形態である「学校が農村へいく」計画や、「興味のサークル」(círculos de interes)が具体的に活性化される。そして七〇年の砂糖生産「一〇〇〇万トン」の年へ入る。

本稿は、修士論文において、主に展開した上の第一、第二の動向の搦手を述べた。それは、政治上の過渡期における教育学的な対象が、政治的人間の形成、政治的意識の内容、政治教育の組織化等、「政治」を中心に展開されるとともに、政治学とは異なった視座から考察されねばならないからである。しかも、その課題の根源には、肉体労働と精神労働の分裂、農村と都市の分立という、資本主義的諸関係の発生以降の問題がある。教育学が単に理論レベルにとどまることなく、具体的な社会主義革命の実践を対象としながら、少くとも政治と教育を対立概念とおさえたり、形成と教育を分離しては説明のつかない事態があることを歴史的に示す必要がある。人間の窮極目標を、理念へ疎外するのではなく、歴史的移行過程の視座からとり扱う方法のためのひとつの礎石として革命教育学校を対象にした。搦手からの一考察である。しかも、政治・教育の研究・考察をぬきに、教育学の歴史的・科学的性格が明確にされていかないのは確かなようだ。

注 〈問題設定〉

- (1) マルクス『ゴータ綱領批判』、レーニン『国家と革命』『国家論ノート』参照。
- (2) 民主主義の消滅に関しては、レーニンの上記書および『帝国主義と民族・植民地問題』参照。「民主主義もまた国家形態であって、それは国家が消滅するときに消滅しなければならないのであるが、しかし、それは終局的に勝利をしめ、強固になった社会主義から完全な共産主義への移行にさいして消滅するにすぎない。」(『帝国主義と民族・植民地問題』国民文庫、一四頁) 教育学における民主主義の問題を、歴史的移行の視座から扱うことは重要な課題である。
- (3) ヒューバーマン、スウィージー『キューバ』(岩波新書・池上幹徳訳) 一六三―一八頁。
- (4) UNESCO "Yearbook of Education" 一九六〇、六一、六二年度、"Cuba" の章参照。
- (5) Armando Hart "El desarrollo de la educación durante el período revolucionario" Cuba Socialista No. 17. (Enero. 1963) pp. 20-39.
- (6) 一九六〇年一月二八日、カストロ演説「子どもより大切なものはない」(『世界と教育』国民教育研究所論稿四／一九六二、二、五七―六四頁参照。Ciudad Escolar 26 de Julio (七月二六日学校都市) は、モンカタ兵營が、学校へつくいかえられたもの (Cuba

internacional, junio-julio, 1973, pp. 110-6)

- (7) “カシロ・シエンフェコス学校都市”はシエラ・マエストラ山中に建設された総面積五〇〇カバエリア(約七三^{km}²)生徒二万人、成年者五〇〇〇人の寄宿学校都市。
- (8) 一九六〇年九月二六日、国連総会でのカストロ演説。
- (9) 教師用教材 “Alfabetizemos” 五〇万部、生徒用教材 “Venceremos” 二〇〇万部、また ‘brigadistas’ には制服、パラフィン・ランプが各人に付給され、一〇万四〇〇〇ペアの眼鏡、等が準備されていた。
- (10) Hugh Thomas, ‘Cuba: pursuit of freedom’ (Harper & Row, Publishers, 1971) p. 1339.
- (11) 文盲一掃運動について Richard Jolly “Education: The Literacy Campaign and Adult Education,” chap. 6 in Dudley Seers, ed., ‘Cuba: The Economic and Social Revolution’ (Chapel Hill, N. C., 1964) pp. 190-205. Richard R. Fagen, ‘The transformation of Political Culture in Cuba’ (Stanford Univ. Press, 1969) pp. 33-68. *この点の詳細は後述する。*
- (12) マルクス『経済学批判』序言。
- (13) アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」(『思想』一九七二年七月号)
- (14) エルネスト・マンデル『現代マルクス経済学』Ⅳ、九八四頁。
- (15) Cuba. Ministerio de Educación. ‘El Movimiento Educativo: 1967-8’. (Habana: Instituto del Libro, 1968) p. 142.

本稿は、以下の論稿をもとにかかれた。

Lionel Soto “Las Escuelas de Instrucción Revolucionaria en una nueva fase,” Cuba Socialista, No. 30 (Febrero 1964) pp. 62-77.
“El quinto aniversario de las Escuelas de Instrucción Revolucionaria” Cuba Socialista No. 53 (Enero. 1966) pp. 72-91.
Richard R. Fagen, op. cit., chap. 5. pp. 104-137.

注<1>

- (1) 党建設の具体的動向については、Andrés Suárez, ‘Cuba: Castroism and Communism, 1959-1966.’ (The M. I. T. Press, London, 1967) に詳しい。
- (2) カストロ、アラゴネスはM-26-7、ロカとソトはPSP。尚リオネル・ソトはPSPの中でも数人のカストロ主義者のひとりである。

- (3) 一二校の説もあるが、ここでは Soto, No. 53, p. 73 に従っておく。
 (4) ヒューバマン他、前掲書、八四頁。

Rolando E. Bonachéa & Nelson P. Valdés, 'Revolutionary Struggle 1947-1958' (The M. I. T. Press, 1972) p. 57. によれば、数学、スペイン語、地理、キューバ史、英語、哲学のクラスが開かれたが、五三年末には、カストロが監禁されたため閉鎖された。尚、その時、フィデルは、マックス・ウェーバー、カール・マンハイム、アナトール・フランス、ホセ・カルロス・マリアテギ、ホセ・マルティ、バルザック等を読んだという。

- (5) 主に Castro 'La Historia Me Absolverá' と Blas Roca 'Los Fundamentos del Socialismo en Cuba' とが用いられた。
 三月一三日ハバナ大学で、三月一六日コンラド・ベニテス学校で、三月二六日にラジオ・テレビで放送。
 (7) Richard R. Fagen, op. cit., pp. 211-222 に、カストロ演説が英訳されている。

〔補注〕一九六三年末までの EIR の学校構成は、ENIR が一校(党、UJC、CTCR は二校、ANAP、FMC、CDR、人民農場、教師、大学専門家、漁民)、党の EPIR が六校、六三年に設立された UJC の EPIR が六校、寄宿制 EDIR が三校、夜間 EDIR が一九四校、計二五五校であった。(Soto, No. 30, p. 75)

注<二>

- (1) Leo Huberman & Paul M. Sweezy, 'Socialism in Cuba' (Monthly Review Press, 1969).
 (2) 教育においては、六三―四年度に、中央集権的組織構造の再編が、〈技術―管理〉(Técnico-Administrativa) と〈管理―人民〉(Administrativo-Popular) の両構造にわたって行なわれ、六四―五年度は、教育内容上において、総合技術教育、職業訓練指導が積極的に具体化され、生産活動と教育を結びつける動きが展開された。教科書も新しく変えられた。
 MINED, 'El movimiento educativo 1963-1964' (Havana, 1964)
 MINED, 'El movimiento educativo 1964-1965' (Havana, 1965)
 (3) Soto, No. 53, p. 79.
 (4) 一九六四年九月二八日の演説。
 (5) Soto, No. 53, p. 80.
 (6) Soto, Ibid, pp. 80-1.
 (7) Book Institute Havana, 'Cuba '67/image of a country' (1967) pp. 370-2.

- (8) Issac Otero, "Las investigaciones sociales en EIR," *Cuba Socialista*, No. 63 (Nov. 1966) pp. 66-82.
Soto, No. 53, pp. 86-9.
- (9) Soto, No. 30, p. 76.
- (10) Issac Otero, "Los cursillos especiales de fin de año para los cuadros de las EIR," *Cuba Socialista*, No. 17 (Enero. 1963), pp. 133-4. Issac Otero は EIR 副指導者 (Vice Directore) で、一九六五年設立された 'Comission Nacional de Investigaciones y Estudios Sociales de las EIR del PURSG' (社会調査・研究全国委員会) の委員長となった。

注<三>

- (1) Fagan, op. cit., p. 225.
- (2) *Granma Weekly Review* (一九六七年三月五日、三月一二日号)
- (3) 首都ハバナには、七万四〇〇〇人に近い使用人と行政官吏があり、その給料は年額一億四〇〇〇万ペソに達するという調査結果がでた。小ブルジョア的精神の最大の拠点になっているのは首都ハバナであると、官僚主義との闘争は、首都における党の最も重要な課題であった。(Granma Weekly Review, 六七年三月一二日号)
- (4) Soto, No. 53, pp. 89-91.
- (5) *Granma Weekly Review*, "The School goes to the Countryside and the School in the Countryside" (七一年一〇月一七日号)「学校が農村へ行く」(Escuela al Campo) 計画が完成されて次の段階として「農村のなかの学校」(Escuela en el Campo) をつくるという路線は、変更されて、同時に遂行されるという路線がとられるようになった。
- (6) MINED, 'El movimiento Educativo: 1967-8', pp. 185-6.
- (7) Primera conferencia de solidaridad de los pueblos de America Latina, 'America Latina: Educacion y Cultura' (Havana, 1968) pp. 167-207.